

元禄十四年刊『俗字正誤鈔』に関する基礎的研究

笹 原 宏 之

一、はじめに

『俗字正誤鈔』は、元禄時代に刊行された、漢字の誤字体・異体字(一)、誤用、誤表記、仮名遣など、文字に関する資料であり、同時にそれらに対する研究資料でもある。本書は、国語学史および文字史において扱われた例が見られず(二)、かつて筆者が目録から存在を確認し、調査を進め、その一部を小稿(三)に引用したのみのようである。

江戸時代において、たとえば訛語に『かたこと』、四つ仮名に『硯縮涼鼓集』という資料があるのに比して、日本における漢字使用の実情を細かく記述し、規範を示した資料はほとんど知られていなかった。本書のように近世初期の版本で、かつ豊富な内容をもつ国語資料・国語学資料が、従来全く扱われなかったことは、しばしば指摘されてきた「文字研究の遅れ」を象徴しているかのようである。異体字などの日本の漢字に関する近世の著述には、

「平板な記述」、「各字の静態的な比較に終わって、このような現象を書記の動態としてとらえ、さらにこのような現象を生じた原因を掘り下げようとする姿勢が全く窺えない」という共通した特色を見いだすという論がしばしばなされている(四)が、そうした認識にも波紋を投げかけるものであろう。

本稿においては、『俗字正誤鈔』の存在を紹介し、本書の特質と、後への影響といった基礎的な面について明らかにし、本書の内容的な研究への導入とする。なお、引用に際して、一部の異体字は正字体に直し、傍訓は括弧の中に入れて示した。

二、書誌

本書は、東京大学文学部国語研究室に所蔵されており(函架番号L三三・一三九 D三〇)、『国書総目録』によると孤本である。書名は、内題(序一オ)に「俗字正誤(ぞくじしやうこ)鈔」と傍訓がある。東京大学図書館の目録カードと『国書総目録』が

「ぞくじせいごしょう」とするのは、誤りのようである。

「正誤」とは、誤りを正すという意味である。これは、契沖の『和字正鑑抄』（一六九五）にならったものとも考えられようが、本書の仮名遣いは、本文（三六ウ）で「宇和」を「うわ」「うハ」と両様に表記しているように、統一的でなく、歴史的仮名遣と一致しないものがある。末尾の仮名遣に関する部分でも同様である。この点から、他の影響を求めると、中国の書名が考えられる。たとえば、唐代の『匡謬正俗』は佚書であるが、元代の呉正道に『字体正誤』がある（五）ほか、明代に焦竑が譌字など「俗書」を正した『俗書刊誤』もあり、これらからの影響も考えられる。この「刊誤」の語も「正誤」と同義である。

次に、編著者であるが、本書には一切記されておらず、未詳である。ただし、本文中に「さる東国の片田舎に」（一五ウ）という表現があり、東国に足を運んだことがある人物のようだが、魚のフグのことを、西国や四国の方言（『物類称呼』）であった「ふくとう」と称している点（三八ウ）から、西日本出身の者であり、次のように引用した材料に京坂の地名・寺社名・店名・橋名が多い点から、京都・大坂辺りに在住していたと考えられる。書中に引用された屋号や商品名には、各地の地名が付けられているが、多くはこの編者の居住地で流通していたものであろう。

〈大坂〉

興徳寺（一七オ）（六）

座摩宮（一八オ）

農人橋（三五オ）

勝尾寺（三五オ）

生玉宮（一八オ）

天秤司（四二オ～四四ウ）

〈京都〉

北野天満（一八ウ）

悲田寺（三五オ）

〈摂津有馬〉

湯の山（一三ウ）

編者は、町人や児童の文字や、書籍の題名の文字に関して、しばしば言及している点から、町人や児童の筆跡や書籍を目にすることの多い立場にあったと推測される。しかし、中世・近世の識字書や、手習いの師匠に対しては批判的であり、そうした本の編者や、書道の師匠とは距離を保った者で、書籍を扱う商人であったとも思われる。本文によれば、『説文』『玉篇』『字彙』『聊邪代醉編』といった漢籍や、『日本書紀』『羅山文集』といった和書を見（後述）、俳諧にも接し（一七ウ、一九オ）、右筆の情報まで得ていたが（三一ウ）、論争の際に、相手に「少しりたりとて」とあしらわれる（五一ウ）ような社会的な立場であり、いわゆる学者ではなかったようである。

本書には、元禄一四年（一七〇二）己五月吉日の刊記があり（書肆は記載されていない）、成立は、その直前であると考えられる。実際に、本文中には、「天下」という語の使用を禁止したという記事（四三オ）がある点から、一六八二年以降と推測できる。また、「俗字」の見出しにも、「延寶三年」（一六七五）や「元禄元年」（一六八八）という年記が引用されており、その年代に疑いはない。さらに、元禄時代の書籍をも載せる享保一四

年（一七二九）刊『書籍目録』（七）には、「字書類」に「一俗字正誤鈔」とのみ載せてある。

体裁は、一巻一冊。序三丁・本文六九丁。一〇三耗×七七耗。

表紙は縹色。袋綴。四針眼。題簽なし（背口に「俗字正誤鈔」と墨書）。版心は、「俗字」、上下黒魚尾、丁付の順。匡郭は四周单边（墨書。八九耗×六三耗）。本文は行書体、一〇行、一行約一七字詰。印類は見返に陽刻矩形朱印「東京帝國大學圖書印」。

四角い枠に囲まれた見出しは、一三〇項目ある（改行してある箇所は一項目とした。以下、注記部分を「本文」と呼ぶ）。ただし、

①一つの見出しに複数の俗字を入れる

（例）「御筆結」（一オ）

②複数の見出しに同一の俗字を重複して示す

「補」（一九オ、五〇オ〜ウ）

③見出しの俗字に関連した俗字を本文中にも扱う

「鮎」（四六オ、ウ）

④見出しの俗字に関連した俗字を本文中にのみ扱う

「圖」（二三ウ）

というケースがある。ほかにも、「又」といい、他の俗字を続けて示す場合に、一つの枠の中に収める箇所と、別の枠に分ける箇所とがあるため、項目数と扱う俗字の数は一致しない。これらの形式により、本書において扱われた俗字は、延べ、異なりとも項目数よりも数が多い。これについては、別に種々の索引を作ったのであるので、別稿をなす予定である。なお、見出し項目は、意味分

野や共通する文字要素により配列されている箇所もあるが、とくに一貫してはいない。

本書の内容であるが、書名に「俗字」とあるように、漢字に関する部分が大半である。本書に扱われた俗字は、次の三種に大別できる。

①誤った漢字字体

②誤った漢字用法

③誤った漢字表記法

これらの詳細を明らかにすれば、元禄時代における「俗字」という用語や概念の一つの範囲が特定されることとなる。また、元禄時代に主に上方で見られた、漢字字体・用法・表記法の実態についても価値のある材料を得ることとなる。これらについても分析を行っており、公表する予定である。

なお、本文には、別の項目に入るべき文が他の項目に誤って入っている箇所がある。「舟のいかり〜正字也」（四オ）は、「鮎」（三ウ）の項目に入るはずのものである。

一方、仮名についてはほとんど扱っていない。本文では、「かちおうじ」（三五オ）、「ひんてんし」（三五ウ）、「せんきう」（四四オ）などを示して、「かな書あやまるべからず」（三五ウ）などという規範的な意見がある程度である。五二オの途中から「かなもじつかひの事」として、仮名字体・仮名遣・「かなうつり」について述べ、「あやまるかな」「本かなつかひ」を表に列挙する。その中の「本かなつかひ」には、「いはゐ」（祝）「花

をおる」(折る)など、前述の本文の場合と同様に、歴史的仮名遣と合わない例がある。この仮名の部分には、「かつわうじ かちおじ 勝尾寺」が載っているように、本文と関連がないわけではないようだが、本文のような出所を始めとする注記がなく、付録のような編集となっている。

三、本書の対象とする漢字

本書の目的は、序文に「今誤傳(つたへ)る兒童のために世上の誤たる文字を書してこれをたゞして正字をしらしむ」(三オ)とある。ここに書かれているように、書名の「俗字」(ハ)は「世上の誤たる文字」を指しており、本書は、それを「正」した「鈔」すなわち注釈書である。

俗字の題材として具体的には、「かんはん等町人の家言葉文字世俗まゝに書しおはんぬ 此外にいくらといふかきりもなく日々に誤り書せん事おはかるへし 先見る処の文字にしたかひて書付侍るものなり」(序三オ〜ウ)とあるように、看板などに書かれてあった町人の俗字を観察した順に写し取った、という。元禄の当時は、「板行」の「今川式目庭訓等の往来もの」や「不学」の「手習の師」が「草行の字よりかんがへて真字を推量(すいりやう)し筆畫(ひつくはく)のたらずあまりある」俗字を書いたり、「文字を異形(いきやう)に書たくおもひ」、好事家が好むような読めない仮名を書いていた(序一ウ〜二オ)という。

編者は、これらの「おびたくし」い俗字を実際に見つけて収集

したりえて、俗字を整理し、それらを記述的態度により忠実に転写し、出所を示した。この点で本書は、元禄期の個々の生きた字体を知ろうと貴重な資料といえる。

元禄時代の他の異体字研究資料と比較するとその独自の価値が分かる。その嚆矢である『異字篇』(一六九〇)^(九)は「墳索ノ中ノ奇字」や「書」の「異字」を集めたとして記されておらず、使用場面などの位相が示されていない。それは、『異體字辨』(一六九二)^(九)も同様で、「伝記所載之古字」、「非常ノ字」ではない「日用ノ字」を選録したとしか書かれておらず、逐一調べて見ると、大半が『字彙』に載っていた中国書に印刷された字体であることが判明する。『正俗字例』(一六九九)^(九)にいたっては、出典に関する記述が全くない。ただ、『新撰用文章明鑑』(一六九五)下巻(二〇)の「充字正字之部(あてじしやうじのぶ)」には「世間(せけん)に書(かき)ならハす充字(あてじ)」(異体字を含む)を並べ、「音相似讀異字之部(こゑあいにてよミことなるじのぶ)」にも「世間(せけん)」からとみられる同訓異字を列挙しているものの、俗字を示した「俗字正字之部(ぞくじしやうじのぶ)」では、俗字の出所を示していない。これらの文献とは異なり、出所を具体的に示す本書の態度は、後述のように本文において、より具体性を強めており、元禄期には例のない、斬新な態度である。

ここで、本書に引かれた俗字は、いかなる出所より採られているのかを考察する。俗字が記されていたものとして、編者により

具体的に出所が挙げられているものを抜き出してみる。

(一) 看板

看板の類は江戸時代には盛んに使われていたが、それらには製作年代が書かれておらず、かろうじて現在まで残った看板にも元禄時代のものとは判明するものではなく、元禄までの看板の実物は、すでに伝存していないようである。しかし、本書は、序文に述べるとおり、当時の看板(二)の字体を複数、それも忠実に転写しており、その点でも無二の価値を有するものである。江戸時代に始まり明治を経て現代まで、看板に記された文字から漢字の字体などの動揺を引用した例は多いが、本書はその濫觴といえる(二)。

商賈(しやうはい)のかんばんなどにあれば(序二ウ)

かんはんなど(序三オ)

おかしき事を見たり 假名(かな)まじりのかんばんに刺そりと書たり(三オ)

これは正しくきさみこんふの勘板(かんはん)なり(二〇ウ)
(一三)

我亭主(しゆ)にあいていふやう 貴殿のかんばんの文字あしし(四二オ)

鵜屋渚白といふ湯やのかはん有(四九オ)

このほか、本文には伝聞中にも「かんばん」の話題が引かれ(四四オ)、編者が看板に対して関心が高かったことがうかがえる。そのほかにも「世俗(に)」「(一二ウ、一八ウ、三〇ウ、四

七オ)、「所々に」(一九オ)といい、俗字を挙げる箇所や、店名・屋号、商品名などの引用例の中にも、看板から転記したものが多かったことが推測される。

編者が見たものと同じの看板であるという可能性は少ないが、現存する江戸時代の看板には、本書に引かれた例と一致するものがある。中には、前後の文字列まで類似している例もあり、本書の写実性を証明するかのようである。仮に「看板文字」というある種の位相性が、通時的にも共通するものとして、本書に引用された例と現存する古看板(一部類似品)の字体とを比較してみる。

【菓】(一オ)ウ 御菓子所又明

御菓子所 (『撰津名所図会』(一七九六—一七九七) 林

美一『江戸看板図譜』(一九七七)

御菓子所 (『絵本御伽品鏡』(一七三〇)『江戸看板図譜』

暖簾)

京御菓子所 (『日本のしるし』)

【京】(一一ウ 京紺屋)

京 (『江戸の看板』。上総)

京いとや (『どうけ百人一首』(一七三五カ)『江戸看板

図譜』。暖簾)

【鏡】(一二ウ)一三オ 鏡屋)

御鏡所 (一八六一年以前。木村捨三『江戸時代商標集』

(木村仙秀集。一九八四)。京都)

【玄】(二〇才 委番)

小野玄入 (岡田義雄『紫艸 江戸商標集』(一九一六)・

『江戸看板図譜』。日本橋の歯医者引札)

【呉服】(二才 呉服屋)

呉服物 (『江戸時代商標集』。大坂)

呉服太物 (『守貞漫稿』『江戸の看板』)

呉服物 (二六八三年か。東都。上総博物館『江戸の看板』

(一九九五)

【刻】(一〇才ウ 割昆布 刻昆布)

割たはこ (西川祐信『花紅葉』・古画(一六六二)坪井正

五郎『看板考』(一八八七))

割蓑蓑 (『御伽品鑑』(一七三〇)『看板考』ほか)

割たはこ(合字) (『百人女郎品定』(一七二三)『江戸

看板図譜』)

割たはこ (『絵本花紅葉』(一七四八)『江戸看板図譜』)

割たはこ(合字) (『撰津名所図会』『図説広告変遷史』)

【座】(一八ウ 座磨官力)

座禅 本座 (『江戸の商標』。江戸地か)

【司】(四二才ウ四三ウ 天秤司)

御筆司 (『江戸の看板』(上総)・『家蔵看板図譜』(大

坂。明治))

御用菓子司 陸奥上卜 (『江戸時代商標集』。伊勢)

御於古子司 (同。江戸)

玉籤司 (同。三州)

御菓子司 (同。江戸)

【師】(一〇才 袁貝師)

鍛冶師 (川柳の挿し絵。『江戸看板図譜』。明治四年)

【所】(一才ウ 耶)

栗おこし煎 (『江戸時代商標集』。大阪)

【定斎】(四才)

定斎(崩し) (『日本のしるし』)

【鍛冶】(三ウウ四才 鍛冶)

鍛冶師 (『江戸看板図譜』。明治四年)

【湯】(五〇才ウ 補中益氣湯独参湯)

紅葉の湯 (『江戸の看板』。上総)

【箔】(三三ウ 箔)

箔 (『家蔵看板図譜』)

【補】(一九才 増補笠君詠諧記、五〇才 補中益氣湯独参湯)

人參補臟圓 (『守貞漫稿』『江戸の看板』『江戸看板図譜』)

【本】(四才 本法字)

本 (文化頃。『江戸看板図譜』)

これらの中には、看板に限らず一般的に用いられていた字体もあるが、この比較の結果、「菓」「鏡」「刻」などのように本書に転写された字体と一致する例がある点から、転写された字体は、原形にかなり忠実であったことがうかがえる。

看板と類似するものに医者の宿札、すなわち表札が引かれてい

る。

(二) 宿札

さるかたいなかの醫師の宿札（やとふた）にかくのごとくあやまれり（八オ）

醫者の学文もあるべき人の宿札にハ似合す（九ウ）

さる東国の片田舎に本道の醫師の宿札如此有（一五ウ）

また、看板と同様の宣伝広告の効果をもつものに暖簾もある。編者は、それにも着目している。

(三) 暖簾

八満屋と云たる暖簾（のうれん）あり 幡の字満の字同じ事と覚たる人の書たるもの也（一四ウ）

このほか、伝聞中にも、「暖簾（のうれん）」（四一ウ）の話題が引かれている。

編者の目は、序文に述べられたとおり、多岐にわたって向けられている。その一つが、刀剣に彫られた銘文ないしそれを集めた書籍である。

(四) 刀剣銘

鍛冶の銘書に如此あり（一五オ～ウ）

鍛冶の兼舛（かねます）も魚舛と銘をかくなり 是ハ根元より如此きり来る銘の文字なれば家の銘を改（あらた）めずして師弟（してい）皆如此きる也 是ハ各別（かくへつ）の沙汰（さた）にして今更改むればかへつて似せ銘となるゆへ也 あらためざるをよしとす（四〇ウ～四一オ）

前者に引かれた「國綱」は『刀剣銘字典』（一九二八・一九七七）、『刀剣銘字大鑑』（一九八二）に複数の例が載せてあるが、この「攝津守國綱」の銘はない。しかし、「兼舛」については、『美濃刀大鑑』（一九七五）や『刀剣銘字大鑑』に収められた永禄ころ、慶長、寛文ころの銘と類似しており、本書の写実性がここにもうかがえる。銘と称する出所としては、次の例もあるが、これは商品名という意味であろうか。

(五) 薬の銘

薬の銘をとなふるに（五〇オ）

編者は、より些細な筆跡にも注目している。編者の実証主義的な態度は、こうした具体的な用例採集に現れている。さらに、山伏のお札、手紙、メモなどの文字にまで言及する。

(六) 山伏の御符

符の字ハ山伏の御符（符）に大かた如此書也（四六ウ）

(七) 女性の手紙

女文章（ふんしやう）の御文（ふみ）などにも（二四ウ）

「とちふう」（四六ウ）が、手紙の封じ目を指すすると、これも手紙から引用したことになる。

(八) 書物箱の書き付け

ある書物箱の云（書）付に本草綱目と書べきを本草綱（もう）目と書たり（一五ウ）

(九) 書物の外題

全の字を児童か金の字とおもふてきんとよむ事あり 書物の外題の下に金と書たるを見たり いふにたらず（三四オ）

(一〇) 他人の覚え書き

増補笠翁誂諧記（ぞうはかさきはいかいき） さる人の覚え

にかくのこく書たり（一九オ）

「覚え書」は一六オにも触れられている。私的な場面で、倉卒の間に生じる誤字にも注意を払い、転記したという編者の行動は、元禄という時代を考えるとまさに異例であろう。（九）以外にも、児童の筆跡はしばしば取り上げられている。

編者は、このほかに書籍を用いている。

(一一) 国書

庭訓（等の往来もの）・かな往来物の本（ほん）（序一オ、ウ、二〇ウ）

小野篁哥字盡（一七オ）

本（四八ウ）

これらも、編者が俗字を比較的正確に転記していることの証拠となる（別稿に記す）。このほか、序文（一オ、ウ）には『今川式目』の名も引かれている。見出しに掲げられた「是式」（二五ウ）などの熟字や「~~後~~出ス」（二一ウ）などの表記には、出典の注記がないが、これらの中にも国書から引用しているものがある。

ただし、これら以外の書籍を引く場合は、俗字を引用するのでなく、文字・表記の正しい「出書」（二〇ウ、二八オ）すなわち出典を求めるためであり、上記までの出所とは逆に、「正字」の典拠を示すことが目的なのである。

先らうにん潦倒（らうとう おちふれ）たる事なれば潦人と書べきにや 羅（ら）山文集にもこれを用られ侍る 又浪人

かとも見へたり 流浪の人と云心にや（二八オ）
日本紀等（とう）に百姓とかきてもゝのおほんたからとよませたり（三〇ウ〜三一ウ）

(一二) 漢籍

漢籍も国書の後者と同様の目的で用いられている。

新しき作り字かとおもへは唐(とう)の武后(ふこう)の作り給ひし文字也 此儀瑯邪(や)代醉に見へたり 其外作り字おほし 國と云字も閑と云事武后の作也(二九ウ)

「瑯邪代醉」は三二オにも引かれている。このほか、
莊子(二ウ)

本草綱目(一一オ、(一五ウ))

論語(四七オ)

漢(もろこし)の書(二七オ)

や、『説文』『玉篇』『字彙』という字書も用いている。さらに、『唐土(もろこし)の人の書しにハ』(一九オ)とあるように、法帖の類をも参看することがあったようである。「醫書」(一二オ)も中国のものであろう。

これらとは別に、編者が実見したとも、文献によったとも、伝聞によったとも思われる例がある。

(一三) 狂歌

むかしの狂哥に 窄人ハ文字に書さへあさましや穴に入ぬる
牛とおもへは いかなる出書ありしや(二八オ)

(一四) 俳諧

さる人のはいかいの付句に ふつきに昌(帛)の帳(とはり)を考へて としられたり(一七ウ)

(一五) 固有名詞

「家名」は序文(三オ)に記してあるほか、

大黒ハ人のしる通(とはり) 福神(ふくじん)をかたどりて

家名としたるものなるを作意にてあやまれり(五オ)

今外ななどハ家名なれども家の文字とハいひがたし 是ハ升
やと書てしかるべし(四一オ)

とあり、序(一ウ)には「名字」もあるが、本文でも人名についての言及は数多い。

人の名に良の字を用ひて五良兵衛など書ハあしし(八ウ)

九オ)

人の名の安之丞と書とて如此書しなり(二二ウ)

ある方に丞の字を慰と書たり(二三ウ)

人の名にじやうの字に允の字も書也(二三ウ)

草に又な之肋と書たるあり 辰ハ誤 辰の字よし 草ハな也

肋ハあばらといふろくの字 人名のすけハ助如此書也(二四オ)

四オ)

治郎右衛門に治の字を書ハ(四四ウ)四五オ)

惣兵衛を宗兵へ(衛)と書もあやまりにあらず 其内醫者出

家の名ハ文字をとハねはしりがたし あしくすればあてじを
かく也 たとへば祐古(ゆうこ)を祐粉と書たる人あり 粉

ハ人の名に付べき字にあらず あまりのあてし也 昌流(しやうりう)を正流と書たるあて字ハ文字ハちかへとも祐粉

(ゆうこ)の粉の字よりハましなり 又由平(ゆうへい)の由の字を書とて油平と書たり 油ハあふらといふ字 人の名に油と云字を付へきや 氣を付らるへし 又好運(こううん)を幸雲と書たりとハさるの誤なり(四五〇ウ)

辰の年に生れたる子辰の介と付る時則辰之助なるべし 其に達之助と書ハあしし 但こびたる人たゝ年のゑとにかゝハラずして達之助と付たくは又達の字よし 惣別猪(い)の年に猪之介と付たらは猪之介よし 伊之介ハよろしからず 狗松犬松ハいづれも犬なれば両字ともにくるしかるまじ(四五ウ〜四六オ)

四方吉ハ不宜(宜) 右衛門吉也 但四方よしと云心にて書たりともそれハよろしからず(四六オ)

地名、寺社名、店名・橋名にも触れていることは前にも述べたが、そのほか次の固有名詞の俗字にも言及する。

境屋ともかけども五幾(畿) 内にあるさかいやハ摂泉(せつせん)の堺の所名也 (一二ウ)

勝王寺(かつわうじ) … 正字勝尾寺なり ことバにてひけばとて王の字書へきやうなし ことさらかなにもかちおうじとかきたるあり あしし(前掲)

貧傳寺(ひんでんし) 京にひでんじと云所あり … 此文字あて字なり 正字ハ悲田寺(ひでんじ)也 かなにてかくとてひんでんしといふ … ひんでんしハ耳にたちてあしし

(前掲)

これらの中に、他の文献と一致する例もある。本書は、他の資料の裏付けにも用いることができ、傍証としての価値がある可能性を示している。「甲斐」を「甲斐」と書く「あやまり」(一九ウ)は、たとえば『和爾雅』(二六九四) (二四)に「甲斐」の「斐」は、草書を見誤って誤解された「非」なる「無字」と推測し、「今は多く斐字とかく」がやはり「無字」という。なお、伊藤東涯『秉燭譚』(二七二九) (二四)には「甲斐」の「斐」が『統字彙補』に「斐」とあると指摘がある。

以上のはかに、明らかに他の人物から聞いた話も載せている。

(一六) 伝聞

中むかしの文盲なる人のいへる事予(よ)も小児の時きゝぬ

(一三ウ〜一四オ)

さる右筆下輩(けはい)の者の戒(いましめ)の壁書(へきしよ)を書時(三一ウ)

うハしまとあらためられしときゝぬ(三六ウ)

牛房と書を世俗のいふハ 房ハふさと云字也 牛の尾ふさに似たり 牛はう又牛の尾に似たるゆへに書といへり(三八オ)

こうした、個性性の高い、一回的な情報を含んでいる点でも興味深いものである。ほかにもエピソードの記録、諺などに富む。

俗字そのものではないが、「京の卿(郷)談(きやうたん)」
「大坂の卿(郷)談」
「讃岐(さぬき)」の方言に関する記述

(三五ウ)も、内省でないとすれば、伝聞であろう。さらに「世上(皆)」(序三オ、三九ウ、四七オ)、「世俗(におほし)」(九ウ、一二ウ、二四オ、三〇ウ、四七オ)、「世間」(多)、「世の」(四七オ)などという記事の中にもこうした伝聞が含まれると思われる。

以上のように、編者は、書籍にとどまらず、街中の町人の看板、表札、暖簾、刀剣、薬、手紙、お札などの日常目にする筆跡・銘文や、他人のメモのような私的な筆跡、さらには伝聞による文字に関する情報にいたるまで対象としている。元禄時代に、すでにこのような記述がなされていたことは、類例がなくきわめて興味深い。編者が見た、これらの「俗字」が書かれていた実物は、ほとんどが今日まで残らなかったようである。そこに書かれていた俗字の中には、本書の発見により、再び世に現れたものも少なくない。

四、編者の規範意識と研究態度

こうした記述主義的な態度に加え、編者は、さらに、俗字を規範的態度により「正字」と対照させ、さまざまな注解を記している。この点では、漢字字体に対する元禄当時の規範意識の具体例として極めて意義深い資料となる。

また、当時の漢字研究の工具書や具体的な方法などの実情を詳しく伝える資料としても価値が高いといえよう。これらについては、改めて論ずる予定である。

このように俗字・誤字・異体字を含む漢字や、漢字に対する意識、漢字に対する研究という、三つの面で価値を有する書籍は、元禄時代、ひいては江戸時代を通して出色のものであろう。この編者の「若又此書面に誤る事あらは後の人又々正し給ふへし」(序三ウ)という言も、常套句とはいえ、正字を求める者の範としうるものである。日々限りなく生まれていく俗字についても、本書の記述内容から類推し一般化して訂正せよ、という編者の要求(序三ウ、三オ、四六オ、巻末など)には、小冊子という閉じた世界の限界を越えて、正しい文字とは何か、という命題を明らかにしようとする意志が現れているようである。

五、後代への影響

本書は、歴史上にその名を残さなかったが、後人に影響を与えていた。

浪花の山本序周が編集した『男節用集如意宝珠大成』(二五)は、本書の刊行から一五年後の一七二六年に出版されたものだが、そこには、『俗字正誤』の名を挙げ、「手跡(しゆせき)を以て推(お)らざる人の真をしらずして草の筆畫(ひつくはく)を以て推(お)して真を書ときハ大にたがひあやまる事」を「あまたしるせり」という。序周は、それに強い影響を受け、自著に「正誤(しやうご)」門を設け、崩し字と誤字・異体字との関係を説明し、「俗談(ぞくだん)」のほか、「まのあたり」にした「簡板(かんばん)」(二三)「戸幃(のれん)」「屏風(びやうぶ)」から具体

例を挙げ、「わざと誤（あやまり）」を「書くという者の説も引いている。さらに、本書を『艸露貫珠』と併称し、「正誤（しやうこ）の説（せつ）等」は「近世發明（きんせいはいつめい）の人の考（かんが）へ演（のぶ）る處（ところ）を記（き）するもの」と、本書の編者を称賛している。また、序周の「省（やつ）せる」、「俗の作字」などの用語も、本書と類似する。

その後は、前掲の目録（一七二九）が、『国書総目録』を除き、本書の名を記した最後の文献となった。この後は、直接の影響関係を示す資料はなく、国語学においても顧みられることはなかった。

しかし、異体字研究資料として知られている『俗書正譌』（一八〇〇）（九）を見ると、その書名の「俗書」が『俗字正誤鈔』の「俗字」、「正譌」が「正誤」と同義であるように、本書と書名が類似している。また、序文の表現にも共通点があるうえ、仮名遣いに関する付録「かなつかひの大概」も付している。この書籍は、内容的にも俗間の文字を集めたという点で一致し、さらに共通する見出し項目も存在する。さらに広く通用する俗字を許容し、『小野篁歌字盡』などの書籍を批判するという態度も示されているように、この『俗書正譌』も、本書を模倣した可能性が高いようである。

このように、国語学史のうちの文字研究史を正確に把握するためにも、『俗字正誤鈔』の存在は無視することができない。

六、おわりに

既述のように、元禄における市井の漢字にまつわるさまざまな事象は、本書がなければ多くは残らなかった。本書は、一冊しか伝わらなかった、三〇〇年前の名もない編者の小さな書物にすぎない。しかし、本書は、いかに通俗性の高いものであっても、漢字史・漢字意識史・漢字研究史の上で、元禄時代の三者の実態を合わせて伝える唯一にして欠くことのできない資料であり、今後注目すべきものの一つである。

こうした内容を有する『俗字正誤鈔』の資料としての価値を高めるために、その全容を明らかにし、編者やその周辺の人々の「俗字」意識の法則性を見だし、その体系性を明らかにしていくならば、元禄時代の漢字規範意識が浮き彫りとなるであろう。今後、この解明のために、内容の詳細な分析を行わなくてはならない。

注

(一) 異体字と誤字体の違いは、社会的な定着と容認の程度の強弱による。

(二) 『国語学書目解題』『国語学大辞典』『国語学研究事典』『日本漢字学史』『当用漢字の新字体』『異体字研究資料集成』などにも載っていない。ほかに、安藤昌益「私制字

書」も異体字研究資料としての要素がある。笹原宏之「安藤昌益編『私制字書』における国字」（『早稲田大学文学研究科紀要』別冊一七。一九九〇）参照。

(三) 笹原宏之「国字と位相」（『国語学』一六三。一九九〇）。

(四) 林史典「近世の漢字研究」（『漢字講座』二。一九八九）。

(五) 清代、謝啓昆『小学攷』。

(六) 現在では、京都ほか各地にあるが、『古寺名刹大辞典』には当時から賑わった現大阪市の一箇所のみを載せる。このほか、このようにして比定したものがある。

(七) 『江戸時代書林出版書籍目録集成』所収。

(八) 「俗字」の語義は、唐の『千禄字書』では「浅近」で「籍帳、文案、券契、薬方」に用いる字体であり、『顔氏家訓』

なども類似の意味で用いていたが、元禄当時の日本では「俗間で一般に用いられる漢字で、とくに典拠のないまたは誤った字体・用法の漢字」に用いていたようである。

『新撰用文章明鑑』に「俗字（ぞくじ）とハ世間にていつの比（ころ）よりか書誤（かきあやまり）て用（もち）ゆる文字（もじ）也 正（ただ）しからぬゆへ俗字（ぞくじ）といふ也」とあり、契沖『円珠庵雜記』（一七〇一以前。

日本随筆大成・契沖全集など）には「畑」を「此方にて作れる俗字」、寺島良安『和漢三才図会』（一七一三。東京

美術影印など）には「梶」などの国字・国訓を「倭字」

「和字」のほか「俗字」とよび、「正字」を探しており、

細井広沢『観鷺百譚』（一七二五。日本書論集成所収）で

は「榊」「辻」などを「和朝の俗字」、「込」を「古き俗字」、「匁」を「錢の俗字」「唐土の俗字」と各種の修飾語を伴って用いている。なお、「俗字」は「正字」と対義にあったようで、松井庄左衛門「童子字尽安見」（一七一六。節用集大系所収）も「正字」「俗字」に分けている。

このほか、書名に「俗字」を用いたものとしては、『国書総目録』に、中村三近子『（筆海）俗字指南車』（一七三二。節用集）、『俗字早指南』（一八一〇刊）、『当用俗字之手控』（一八一六。国会図書館蔵）、『俗字引節用集』（版本）、『俗字大意抄』（文字）、『俗字関巡り世話字集』、『俗字類聚』が見えるが、本書に先立つ書籍はないようである。

(九) 『異体字研究資料集成』所収。

(一〇) 『近世文学資料類従』所収。

なお、『新撰用文章明鑑』には本書の収録字体と一致ないし類似する例が少なくない。「牛房 牛旁」「窄人 窄人 浪人」「拔 抜」「争 争」「牧 枚」「尻 尻」「網 綱」「刈 刈」「傳 傳」「博 博」「弓 弓」「全 全」「至 玉」「皿 四」「舛 舛」「吉 吉」「叩 叩」「訴 訴」などが挙げられる。

(一一) 看板が人々の注目を集めるようになったのは、元禄時代からといひ（『江戸の看板展』（一九六二））、その時期

と符合する。『看板考』などに「看板書きの始りは天明寛政の頃」で、「其以前は人々自ら認めたのでござりませう」とあるが、本書の序文に「わるこびなる筆者」、本文にも「可及老」などの記事があるところから、この記述よりまさかのほることが判明した。

(一二) 江戸時代のうちでは、この後、『雑交苦口記』（中田竹翁軒。一七六四以降成立、一七六九写本。『未刊隨筆百種』『江戸の看板』）に「世の中に愚人は多し。別して町人に多し。看板のふれんなど己が物好に任せて、唐よふ又は日本流にても大師瀧本或は嵯峨流などに書せ、我壹人面白がり人の目にはよめぬ文字多し、是大なる商賣の邪魔なり、矢張（やはり）日本流のよく女子わらんべもよめるやうに平かなをもつて、御家流か本目流にて書時は、小兒女子もよみて其所へ其品を求めに来るぞかし、」「物好は入らぬ事」、「醫師などの名を物好に遠き文字を附るは不智の人なり、宿札などにも女子輩も能よめる様に立廻る文字にて書が智なり」と、書風・表記・使用漢字に関して、本書と類似する主張がなされる（竹翁軒には、ほかに一七六八年写『元禄年中大地震大火事記』があるという）。『我衣』（一八〇四〜一八頃）に、天和（一六八一〜一八四）の「菓子店ノ看板ニ、仙臺繻ト大師流ニ書タリ」「ほしいトヨメタリ」「元禄ノコロヨリ、カラスニ三羽ヲ畫カキ本字ヲ失ヒ」とあり、『式亭雜記』（一八一一。『江戸の看板』）

に、浅草見付より雷神門の「招牌」に「文盲」凶南の「誤字」、金竜山浅草寺百度詣の「さしを投入るゝ箱」に「百度（一画不足）敷」、上段の箱に華淫流で「敷」を「数」と誤記してあると記されている。

なお、幟や看板における仮名遣の違例については、『守貞漫稿』（『江戸看板図譜』）、『看板考』などにも記述がある。

このほか、街中の誤字については、『傍廂』（一八五三）に「鶴」を或御家で真字に直しひがめて「露」と書き、芝露月町の天水桶（防火用に雨水を貯めておく大桶）に「露月町」と「ひが文字」があり、書家の無学を責めるという記事がある程度である。

なお、挿絵に写された看板の場合は、『江戸看板図譜』に、挿絵と実際の箱看板との相違が説かれているように、書籍の創作や筆者の書き癖も加わりうるので、その写実性に疑問が残る。

(一三) 安土桃山時代の末期に、「鑑板」から「看板」の表記が生じたともいうが（『江戸看板図譜』）、「かんばん」「簡板」（『人倫訓蒙図彙』）「勘板」（『用捨箱』）「道戲興」（一六九七）『江戸の看板』）「招牌」などの表記も行われていた。

(一四) 早稲田大学図書館所蔵版本。

(一五) 『節用集大系』所収。

参照文献（注記引用分以外）

高橋正人「江戸時代ののれん印・看板・商標」（『言語』。一九八四・一二）

高梨信博「近世節用集の序・跋・凡例」（『国語学 研究と資料』一一〇一二。一九八七～八）

松川弘太郎『狂詠と江戸看板』（一九二九）

付記

『俗字正誤鈔』の翻字の際に不明箇所解説や近世の看板に関して文化女子大学の原島陽一教授に、刀剣銘の現存の有無の確認に関して財団法人日本美術刀剣保存協会資料課の日野原大氏にご教示を賜わった。ここに記して御礼を申し上げる。

（ささはら ひろゆき／文化女子大学専任講師）